

## 第3章 習慣・態度の育成を目指した授業研究

### 第1節 主として教授論的考察

#### §1 水泳

〔はじめに〕

われわれは、大学正課体育を充実していくため、授業を通じた実践的研究を継続してきた。すなわち第2報<sup>※1</sup>では、過去にうけた学校体育における体育・スポーツ活動で、マイナス的経験をうけた結果、体育・スポーツに非好意的態度あるいは拒否的態度を形成している学生の存在を報告したし、第3報<sup>※2</sup>では、学生の内的学習過程が個別的で、多様性に富んでいることが明らかになったことからひとりひとりの学生に相応した教育活動の必要性和重要性を確認した。換言すれば、大学生は、過去にうけた体育・スポーツの経験によって影響を受け、ある特定の態度・習慣を形成しているといえる。そして「この態度は一旦形成されると、その関係する対象や状況に対するその人の反応を規定するようになるから、いい反応へ変えるためには、その人の態度を変える」<sup>※3</sup>必要があるので、大学体育は充分配慮する必要がある。

しかし、「人間は年齢の如何を問わず、自力による人間形成や自我の確立が幼児にはじまって、成人まで続くいかに独自の発達過程<sup>※4</sup>」といわれるなかで、「大学期は心身発育の成熟期<sup>※5</sup>」であり、「人の一生の間で身心両面での変動が最も激しいのは思春期<sup>※6</sup>」で、エリクソンのいう「自己アイデンティティ確立にかかわる危機をとおして、新しい自分を創造し、成長していく時期<sup>※7</sup>」であるだけに大学体育における学習者の態度変容あるいは自己形成の可能性はあるという観点で考えていきたい。

そこで本研究では、大学正課体育において、学生ひとりひとりが泳ぎを方法的媒介として、どのような自己形成を行い、自己を成長・発達させているかその実態を明らかにすることである。

〔研究方法〕

#### 1. 対象者

筑波大学正課体育において、水泳を受講する人文系 3年生 20名（女子11名）と工学系 1年生 22名（女子2名）2クラスである。（対象者のプロフィールは、表22に示すとおりである。）

#### 2. 調査研究期間

昭和55年度の水泳授業（55.4.16～56.2.18）で、年間の教授目標および内容とその配當時数は、表23に示すとおりである。

#### 3. 調査方法と期日

表 22 対象者プロフィール 1学期最初の自己申告 水泳能力

水泳能力/クラス	人文系3年	工学系1年
泳げない	0	1
25M未満	2	0
25～100M未満	7	4
100M～	3	1
200M～	1	3
400M～	7	13
計(人)	20	22

表 23 昭和55年度水泳授業の学期ねらいと教授内容概略

学 類 (学年)	受講者数 ( )内女子	教 授 内 容 ( )内時数		
		1学期(4～6月)(9)	2学期(9～11月)(11)	3学期(12～2月)(7)
A 比 文 人 間 人 文 社 会 (3)	20 (11)	オリエンテーション	10 潜水 (3)	10 飛び込み (3)
		距離泳チェック (1)	分 立泳ぎ (2)	分 日本泳法 (3)
B 社 工 基 礎 工 情 報 (1)	22 (2)	10 浮くこと (1)	間 泳ぎ (2)	間 (横泳ぎ)
		分 進むこと (1)	泳 飛び込み (2)	泳 (片拔手)
		間 50 m測定 (3)	200 m測定 (1)	200 m測定 (1)
		泳 1,000 m測定 (1)	50 m測定 (1)	
		体力テスト (1)	10 潜水 (4)	10 水球 (3)
			分 水球 (4)	分 日本泳法 (3)
			間 200 m測定 (1)	間 (横泳ぎ)
			泳 50 m測定 (1)	泳 (二重伸し)
				泳 200 m測定 (1)
水泳授業の学期のねらい		泳ぎの基本の実践的理解、楽に長く続けて泳ぐ。	いろいろな水泳を経験し、水中での自在性を獲得する。	左上同じ 水心一如的水泳を体得

㊦ レポート記述方式—水泳と自己とのかかわり合いについて「私と水泳授業」という題のレポートを、12月1週に出題した。提出は56年2月1週までに全員完了した。なお、レポートをまとめるにあたり参考図書として、中林雄二郎著「知の変貌」を採用し、必読とした。

㊧ 水泳能力測定—200M速泳タイムを11月1週(2学期末)と56年2月3週(3学期末)の2回測定した。泳法は、各自自由としたが、各々の測定時の泳ぎは、同一泳法とした。

なお、レポート記述の概要と水泳能力は、表24(人文系)、表25(工学系)に示した。

自己形成過程の状況を分類するにあたっては、次のような諸文献に依拠している。

表 24 水泳授業における自己形成過程と水泳能力 (人文系 3年)

(女子) 学年 科目 学期	水泳 (200m泳タイム) 11/4 2/17	シポ ー ト 概 要	自己形成記述 ◎ 特 に × 大 し ○ よ く ? 不 確 定 △ 少
1	又席 見学	1学期の始め水泳士の音声だったのでプールに行くのが嫌。10分間泳いで水に慣れ、泳ぎが楽になるにつれ、水泳への心持ちがわる。主体的に自分の泳ぎをよくしようとする姿勢が少し感じられるようになる。毎日の生活の中に真の経験を味わっていかば上出来なのではないだろうか。	○
②	クロール 見学	抵抗のないスポーツだから水泳は好き。運動するのは、私の精神を活性化させるため。(パトスは自己の存在を自覚させ、能動性を目覚めさせる) 200m泳測定の時、150mでギブアップしそうだった。この苦しさで死ぬかという恐怖を抱いた。(息苦しさ=恐怖)	?
③	平泳ぎ 見学	水泳を学ぶ体験はフルート練習と似ている。常に体験を自分で確認しながら進むことが必要。水泳で感じたことは、身体の動きに思考をとりこむ必要性だった。自分のやるうとすることを理解し、実際に行ない、行ないながらそれを確認する一連の過程を意識下へ引き出す→はるかに能力があることとは新鮮な発見。水泳の収穫はとかく流れがちな時間を引きしめる役目をしてくれたこと。	○
④	クロール 6分55秒 57	小さい頃から体育は苦手だと思いついてきた。水泳もずっと顔を上げないで平泳ぎばかり。ただ水の中で暴れていたようなもの。体育をやりたい意志が強かった。泳いだ後の締めやかな快感。他の授業より私をみつけてくれました。人は誰しも何につけてもある程度の能力を持っているが、私がそれを思う意志や機会があるかないかによって、それが発揮されるか否かが決まると思う。	◎
⑤	クロール 4-25 40	又席 大学で山登りを始めた。(重い荷物と背負って苦しい思いをしてどうして山登りするの?) “知の変観”を読んで意味づけできた。水泳においても自己との戦いの中に厳しいトレーニングを重ねるのだけれど、私が山登りで経験しなかった“時間との戦い”がある。(時間というものは、使いうによって、生きてもくると、死んでしまうものである。)	?
6	平泳ぎ 4-12 38	4-00 93 その既製の価値観を「経験と身体の間」にたち帰って問い直そうとする「知の変観」の試みは、私にとって刺激的であった。水泳授業はまず体を鍛えることに役立ち、自分の体の疲労や他者とのいくつかの比較を通じて自分の存在を自分が感じることと促したと言える。	○
⑦	平泳ぎ 又席 6-07 93	相手の立場に立つこと、自分が同じ状況ならどうするか。知識を自分の経験に照らしてみる。実際に泳いでみる。思うようにできない時には知識の再確認をする。この本からの収穫は「時間」感覚を無意識の中から意識下へ引き出せたこと。	△
⑧	クロール 3-55 93	3-47 93 大学の水泳授業で初めて理論的に「泳ぐ」ことを考えるという態度に接した。理論を知っていることとそれができることは…イコールではない。何も考えなかった→考える水泳→実践の段階 「何故、効率よく泳がなくてはいられないのか?」 私にとっての水泳は…損得を考えることがなく能力の限界に挑戦。向上すれば心の潤い(満足)と自信が生れる。	○
9	平泳ぎ 4-54 11	4-31 07 動作前のイメージと動作にはずれがある。(一瞬にして一つの目的に最も効果的な態勢をとらせることができるのは…この頭の中の(絵)の働き) 水泳で自分が水と接していることを忘れ、体の動きも意識に上らなくなる。こうした経験が私の記憶、それは頭であり、身体であれどどこかで血となり肉となって(感覚的理性)のはばを、深さをほり下ろしてくれるだろうと思っている。	○

# レポート概要

① 女子 3年	水泳能力 (200M泳914)		自己形成記述 ◎推しXなし ○よく?不明 △なし
	泳法	2/17	
⑩	平泳ぎ	4分39秒40 4分46秒99	私は運動があまり好きではないようである。自分がこれまでやってきた運動に自主性がほとんどないことに気付く。何事も身体が資本だというのはありふれた言い方だが、最近ほとみにそれを実感する。 <span style="float: right;">△</span>
11	平泳ぎ	6分04秒88 4分32秒60	水泳を選ぶにあたって、カナヅケを考慮に入れ、清水の福台から飛び降りる覚悟を要した。しかし困難を一つ克服することはすばらしい。一回目の苦しさをやめたいと思ったが、二回目に胆力をふりしぼって出陣したことから開けた。水泳観の変化は180°転回しました。 <span style="float: right;">○</span>
12	フロール	2分55秒40 2分45秒95	私は中学・高校を通して水泳部。水泳にかわり自信があるつもり。水泳を選んだのは泳力を落とすたくはないと考えたから。授業は集団で泳ぐので一人で泳ぐより精神的に楽=自己に強制できるのは非常に都合がいい。私はアメリカンフットボール部に入っているのでフール開放率利用しにくい。 <span style="float: right;">X</span>
13	フロール	3分31秒04 3分35秒33	うまく表現できないのは残念だが、この10分間泳は非常に単調なもののように感じられながらも、実は微妙な変化に富んだものであり、またその動きが単調であるからこそ、行動の主体である人間(自分自身)の精神に大きな変化とその喜びをもたらすのであろう。 <span style="float: right;">◎</span>
14	フロール	3分43秒00	又 岸 我々は泳ぎを習った初期においては、今は水の中を動くだけ、足はど うしても沈んでしまい、水の抵抗を大きく受けるという泳ぎしかでき ない。その我々が初学のよい泳ぎを習得するに必要なものは、「能動的 に」身体をそなえた主体として「抵抗物を受け止めながら」練習して いくこと以外はないであろう。水に対する恐怖から息つきがうまくいか ず、故に体が沈んでしまう人は、何かの方法によって水への恐怖を 克服してゆかねばと遠慮できません。 <span style="float: right;">?</span>
⑮	平泳ぎ	7分41秒00	見 学 経験とは…先行経験によって後の行動が決定される。(私は泳げない のだとレッテルをはる。水泳は非常に苦しいスポーツで呼吸を限界まで 押さえ、それに耐えられる者が泳げるのだというイメージを植えつ けてしまった。)大学の水泳授業で、ただ「泳ぐ」ことにしても色々 な形で泳いでみる、色々な方法で前に「進ん」でみる、「沈ん」でみる →水を征服するのではなく流れにのるということを感じる→「アッ やれないことはない」先行経験を行き渡る勇気と要びが大切 <span style="float: right;">◎</span>
⑯	平泳ぎ	5分13秒75 5分20秒89	フ ロ ール 思 つ ま が たい へ ん 不 得 身 で、 フ ロ ール =苦 しい とい う 図 式。 頭 が い っ ま で も 上 向 き、 こ れ は よ り 空 中 に 近 く あ り た い と い う 無 意 識 的 行 動 だ と 思 う。 も と よ り そ の よ う に 考 え た こ と は な か っ た の だ か ら、 感 覚 的 な 水 に 対 する 恐 怖 は 案 外 に 消 え て 自 分 が 水 を 支 配 さ る よ う な 気 分 に な っ て き た。 今 度 は 水 を 正 視 し て 泳 い で み た。 ず と 案 外 に 進 ん だ。 苦 しい こ と も な い。 か つ て 大 変 な こ と を 水 泳 が 好 ま し な っ て き た。 <span style="float: right;">◎</span>
⑰	フロール	140M	見 学 私にと、水泳は今まで苦きなもの。苦き水泳をとったのは、自ら水泳というものにぶつかったゆえ、自分なりに泳ぐということも消化してゆこうと思ったから。具体的収穫として、ゆたかとも水泳が苦きなものではなく、たことがあげられる。これからまだまだ伸びる余地は残されている。私なりに…真の経験としてゆこうと思っている。この考え方は水泳以外にもあてはまると思われる。 <span style="float: right;">○</span>

女子 (学年)	水泳能力 (200m泳914)		レポート概要	自己形成記述 ◎非常に×なし ○よく?不明 △少し
	泳法	2/17		
18	平泳	6分37秒83	欠席	◎
19	フロール	4分47秒04	4分09秒00	◎
20	フロール	3分13秒27	3分09秒28	◎

表 25 水泳授業における自己形成過程と水泳能力 (工学系 3年)

女子 (学年)	水泳能力 (200m泳914)		レポート概要	態度変化状況 ◎非常に×なし ○よく?不明 △少し
	泳法	2/18		
21	フロール	3分56秒76	3分43秒66	◎
22	平泳	欠席	3分42秒34	×
23	フロール	2分36秒57	2分26秒52	?
24	平泳	3分51秒94	3分41秒23	◎

年(子)	水泳能力 (200m泳)		Lポート艇乗	履修状況 ◎修了X未 ○よく?不 △欠	
	泳法	時間			
25	平泳 8分43秒06	7分07秒26	この一年間の水泳授業では、既成の水泳、泳ぎの物理学といった理論を各人の全体経験によって内面化・身体化したといえる。しかし…自己と現実とのかけわりまで思いは通らなかつたと反省する。泳ぎ読みではあったが「知の変貌」を題材にして自分なりに考えを組立てられたのは、物事を考える上で良い機会になったと思う。	?	
26	フロール 25M	6分32秒65	私にとって水泳授業は週に1回という非常に小さな部分の時間である。しかし、最初全く泳げず、歩きながら呼吸練習。フロールで泳げるようになり…水泳授業における私の歴史はとてつもない大まなものを思える。高校時代から根性がないと言われ続け、大学に入って少し恐くなった。休んでしまおう→少しづつ練習しよう→苦しくてもがんばろうと思うようになった。水泳授業は私にとってアツアツのある記憶。	◎	
27	平泳ぎ	5分10秒47	4分58秒25	水泳の授業は週に1回だけ。そしていわゆる競泳的な泳ぎ方を習うのは10~20分位。だから講義やドバイスもその時間の練習では奥手には不十分。ある週の水泳授業で指摘された点についてその時必死にはおそうとしますが、次の週になるとその点を注意されたりする。つまり受審というものが弱すぎて、自分にとって完全なる経験となりきってはいなかったのです。	?
28	フロール	3分27秒28	見学	(大学では)授業中に生活における唯一の運動する機会。運動をやめたことで身体が弱くなったし、精神的にも根性が弱くなってしまった。この本を読むことは時期的にも適していたと思う。水泳の授業について先生の意図がつかめた。それが自分にとっていかに大切かということもわかった。これからそのことを十分に認識して逃れず、受審の経験として生きていきたいと思う。	?
29	平泳ぎ	5分01秒05	4分32秒40	水泳をとった理由は一年中泳げること、選択者が少ないという正直な考えであった。思えば水泳の授業は最初から自分の精神との戦いであった。初期の頃10分間泳に対して受審的であった→自分の姿勢のカーブ記述は…意識化のなまり→自分の泳ぎに対し意識的になる=泳ぎがよくなるという自身が弱がでた→一年間水泳授業を通して自分の運動に対し意識的になり、それを通してこういう姿勢だけはできた。	◎
30	平泳ぎ	4分34秒02	4分14秒60	水泳の選択理由は人生にできる。しかしその内容はバウエティに響いて新鮮で…人間の体や健康という問題や「泳ぎ」というものに対する認識が多くなりとも深まり視野が広がったように思える。体が眠っている一時間目の水泳授業は非常にすばらしいが、それが水泳を通して自分の体の調子とか健康というものに自然と関心が向くようになった。水泳というのは意外と奥深いものであると強く感じさせられた。	◎
31	平泳ぎ	3分52秒32	欠席	大学での水泳は小・中・高でやったものとは全然異なっていた。理論の正しさを見出した時、何らかの痛足感があるものです。体目録目は苦しい。しかしこの苦しさがあから「よしがんばるぞ」とふんばりをまかして苦しみに立ち向かっていく。そのような経験からこそ自分に何か得るものがあるように思われる。	○
32	平泳ぎ	6分49秒33	6分22秒41	25m泳いだら11ターハター言っていたのに、現在はその10倍の250m泳いでもそれほど苦しいと思わない。すごい進歩したと思うが、持っスカーはあるがその他の運動機能は確実に低下した。選択の時「泳げないのに恥をかかなくて必要はない」と迷ったが、今振り返ってみて、人並とはいかないまでも泳げるようになりたいので有意義な授業だったと思う。	△
33	フロール	4分03秒13	4分02秒30	「知の変貌」を読んで印象に残ったことは「人は知らず知らずのうちにある一つの物の見方、感じ方にとらわれている」ということ。水泳の授業について考えをみるといくつかあるが、最たるものはフォームである。自分を持っていくイメージとちがう泳ぎをしているのに気がついた時は、ずいぶん驚くことがある。	△

セウ 子印		水泳能力 (200M泳914)		シポ-ト概要		態度変化状況 ◎非常 Xなし ○よく?不明 △なし
泳法	11/5	2/18				
34	平泳	3分51秒94	3分43秒43		高校時代(体質は好きにならなかった。成績が悪く、スポーツをやる喜びを感じなかった)。大学初期、水泳の時間は自分にとって重圧になりそうだった。10分間泳では何度もやめようと思った。しかし15分間の授業を終えてみて、やり終えたという実感がどこからともなくわいてくることに気がついた。いい汗をかいているという実感がだんだん快感に変わった。体全体を動かすことにより身体的充実感が伝わってくる。一回戻席してみてもいいと理解した。	○
35	平泳	4分20秒48	4分05秒79		水泳授業は自分自身の未知の部分の開拓ではないかと思える。最初の発見は「水に対する恐怖」。深い側へ行くにつれ水底が遠ざかっている。すると深みに対する恐怖と同時に「自分が宙に浮かんでいる」という感じが私の手足をこわばらせた。第2の発見。2mも潜ると耳が痛くなる。耳抜きができてほんのわずらく多く水中を動き回った時、人によって時間というものは時計だけでは測れない。	○
36	クロール	2分58秒13	2分55秒77		高校時代部活で3年間水泳をやっていた。大学、週一回であるが、腕のかきも確実によくなってきているし、明らかに体かもつてきた。又、潜水・水球・日本泳法と狭い範囲であるがいろいろ経験した。このような小さな経験の積み重ねによって自己の内面を鍛え、人間が大きくなるのだと思う。	△
37	平泳	4分29秒14	又席		10分間泳は自分との戦いである。比較の対象は過去の自分だけである。むしろマイペースで黙々と泳ぐ。結構疲れるし、苦しいが記録はそう簡単に伸びるものではない。肉体的な限界のため伸びないというよりは、精神的な甘さが伸びない原因のようにも思える。水泳の授業は人生に必要経験を得ていくプロセスの一つのめりやすいサンプルと思えないだろうか。自分と戦うことにより、自分を知り、自分を知ることによって自分と戦う。	○
38	クロール	3分11秒29	2分59秒63		水4一中3 水泳部。頭で覚えたものでなく、身体で覚えたものはなかなか忘れられない。水泳は私にとって身体だけでなく、精神を鍛えてくれたと思う。	?
39	平泳	3分58秒00	見学		水曜日は前日予習のための睡眠不足の日が続いた。水泳の疲れは一日中尻尾を引いた。10分間泳はマラソンである。5分を越える頃になると手足の感覚はなくなる。ただ慣性で泳いでいくか。途中でもうやめたいと思った事など幾度もあった。でも泳ぎ切った時のあのホイッスルの音は忘れられない。ただ流れ行く時間の中でこれだけ充実した時は思えそう多くない。10分間泳は私の生活で最も充実した時間との戦いに思えてしまうがよい。	○
40	クロール	3分45秒39	3分36秒51		最近、いやもっと以前からかもしれないが、運動不足なのである。どうも体についたぜい肉が気になる……水泳授業では150~160位に泳があげられる、いろいろ泳ぎを覚えたら泳ぎも向上した。水泳授業は充実した時を過ごせる→水に入ると体が動かしやすい気持ちのいいせいか、時間はあまり気にならないのである。	△
41	クロール	3分11秒09	又席		体育授業は普通の講義と違い、他の学級の学生と一緒にできるのが新しい友人ができて、私にとって楽しい時間である。講義が単調な一本の糸(時間)のような感じがする一方、体育の授業は幅を持った変化のある時間のような感じがする。	?
42	クロール	4分42秒55	4分12秒83		スポーツは人より知るので苦痛の種だった。中学水泳部でも落ちこぼれスポーツへの悪感。高校、甲信関で延長18回黙いぬいた友達をみてもスポーツをしたと思うようになった。体育は下手なりに楽しむことさえできるようになった。スポーツは今の私にとってカマセぬものとなった。身体と陸はますます一連の主題であるのだ。理性より経験の方が身体にあるをもちと	?

- ④ 自己実現 — エリクソン「自己の可能性を生かすということが自己実現<sup>※8</sup>」であり、マスロー「自己実現とは前進の過程<sup>※9</sup>」であり、ランゲフェルド「自分にもできるんだとは、未来において実現さるべき自己自身を目標とした努力<sup>※10</sup>」であり、カール・ビューラー「学習のプロセスが快感つまり機能させることは自己の可能性の実現なのであり快感」という範ちゅうとした。
- ⑤ 自己認識の拡大・深化 — オールポート「自己感覚の拡大、情緒的安定・自己受容、自己の対象化<sup>※12</sup>」であり、ロロ・メイ「自己の身体認知の回復＝身体を通してつくるいろんな反応に調和していくこと<sup>※13</sup>」や「自分の内界へ深く沈潜してゆくこと<sup>※14</sup>」を含んでいる。
- ⑥ 他我認識（対他 — 対自化現象） — ロロ・メイ「自我は対他関係の場で生まれ、かつ成長する<sup>※5</sup>」、メルロ＝ポンティ「主観性や相互主観性がわたしの過去の経験を現在の経験のなかで捉えなおし、また他者の経験をわたしの経験のなかで捉えなおすことによって世界を見ることを学びなおす<sup>※16</sup>」、マルチン・ブーバー「人間の実存の基本的な事実は、人間と共存しつつある人間である。いい人間はつまり自我は、汝との関係に基づいてはじめて存在する<sup>※17</sup>。」によった。
- ⑦ カルチュア・ショック現象 — 石田英一郎「個人は一定の文化の中に生まれ、その文化によって行動を規定される。<sup>※18</sup>」そして長島信弘「新しい環境や対人関係を体験することによって生じる一種の精神的・肉体的危機状況をカルチュア・ショック<sup>※19</sup>」というが、T・ホール「自己を認識することと文化を認識することは表裏一体である。……異文化と接触するという体験をうまく生かせば、視野が開け、自国ではふだん見ることのできない目で、自分を観察することができる<sup>※20</sup>。」

## 〔結果〕

自己形成過程の状況を明らかにするため、「知の変貌」を参考図書とし、自己と水泳とのかかわりについてまとめた結果は、次のとおりである。

1. レポート作成のために採用した「知の変貌」は、自己と水泳経験とのかかわりあいをもとめるのに、42人中15人の35.7%が、有効性があったと推定することができる。
2. レポート記述に、水泳授業が自己形成に好ましい影響を及ぼしていると思われるものは、表26のとおり42人中29人の69.0%であった。
3. 水泳能力（200m持久泳）の優れている者も、劣っているものも好ましい方向への自己形成過程状況については、同じ傾向にあることが推定された。（表27）

また、持久泳で速く泳ぐ能力という水泳パフォーマンスの顕著な向上者は、パフォーマンス後退者に比べて、より好ましい自己形成が大きい傾向がうかがえた。（表28）

4. 自己形成過程の状況は、レポート記述から次のようにまとめることができる。
- 1) 自己実現による場合（1)内の数字は、レポート番号

④体育は苦手（④, ⑫, 26）や体育は嫌い（⑩, 34）や水泳は苦しい（⑬, ⑮）や水泳技能は低い（11, ⑮）や大学体育に対して期待感欠如（24）等、過去の経験によって形成したいろいろな態度を、技能を向上したり、水泳への実践知の拡大あるいは深化することによって自己実現をはか



表 26 態度変容の状況

	イ	ロ	ハ
A	15	1	4
B	14	1	7
計	29	2	11

◎非常によく  
 ①よく 態度変容していると判断できるもの  
 △すこし  
 ロ × (イ)と判断できないもの  
 ハ ? 記述から判断できないもの

表 27 水泳能力と自己形成との関係

速い		遅い		全	
男	女	男	女	速い	遅い
12 ?	5 ?	33 △	4 ◎	7 13	5 10
20 ◎	8 ○	42 ?	17 ○		
23 ?	19 ○		26 ◎	53.8%	50%
36 △	21 ○				
38 ?		18 ◎	7 △		
34 ○	3 ○	25 ?	15 ◎		
35 ○	10 ×	32 △			

表 28 記録の進歩と自己形成の関係

	進歩程度		
顕著な 進歩者	④ 9.7%	◎	5 7
	11 25.3%	○	
	⑬ 13.3%	○	
	25 18.2%	?	
	⑳ 00	◎	
	29 9.4%	◎	
42 10.5%	?		
後退者	⑩ -2.3%	×	2 3
	13 -1.7%	○	
	⑯ -2.2%	◎	

って、それらを克服し、成長していることがうかがえる。

㉑水泳授業に於る教授内容の困難さや苦しさのうちかち、やり終えた時の達成感のよこび (⑧ 39, 34, 31) や10分間泳も単調のなかにも変化を見出し、つまり泳ぎへの意味づけで学習内容のよこびを見出し (13) 主体的に楽しさを實現していることがうかがえる。

㉒水泳はきっと体を動かして気持ちよ (40) や運動するのは、私の精神を活性化する (⑩) に示唆されるように、学習すること自体によこびを得ていることがうかがえる。

ロ) 自己認識の拡大・深化による場合

㉓自分の泳ぎに対し不注意だったものが、フォームや動作に注意し、鏡像段階に気づき、身体図式を拡大化したり、深化をはかっている。(④, 6, 9, 33, 35)

㉔身体の動きに思考を取り込み、理論と実践の統合をはかっている。(③)

㉕その日の体調に、泳ぐときの運動負荷を加減したりして、自分の健康・体力を推察し、自己認識を深めている。(⑬, 30, ⑩, 39)

㉖泳ぎをとおして自己を知り、更に自己の未知なる部分を開拓している。(35)

ハ) 他我認識 (対他 - 対自化現象) による場合

水泳授業は、自分の体の疲労や他者とのいくつかの比較を通じて自分の存在を知る (6) や、初

心者の必死な練習態度や全日本シンクロ選手（大学プールで丁度全日本シンクロチームが合宿中で「シンクロとは」を説明するため、基本とルーティン演技を示範してもらった）の厳しい練習をみて、自分の努力不足や甘さに気づく（24）等に示唆されるとおり、他者を理解することで自己認識を拡大、深化していつていることがうかがえる。

## ニ) カルチュア・ショック現象による場合

過去に受けた水泳授業と次のような諸点で異なっていることが指摘され、自分にとって好ましい学習内容と判断し、新しく視野を拡大していることがうかがえる。

④教授目標および内容・教授方法の違い。— 大学の水泳授業で基本的な泳ぎ方をいろいろ経験し、楽に泳げるようになった（15）や泳ぐだけでなく潜水、飛込み、水球等内容がバラエティに富んでいること（18, 23, 30, 36）や理論と実践とが統合した内容であり方法（3, 8, 31）であるという記述に示唆されるとおりである。

⑤評価法の違い — 私のうけてきた体育では、うまく泳いだり、速く泳ぐのが中心であったが、大学にきて自分の身体に相談しながら泳げるようになった（19）や、横泳ぎの練習のとき、水に身を乗せる、口もとまで迫ってくる水を感じて……水を親しく感じる気持（18）（※この時限は、日本泳法の横泳ぎを指導したが、形、品格、残心を強調していた）の表現から推察されるとおり、かつての体育授業の評価に抑圧された状態から、楽に長く続けて泳ぐやいろいろな水泳を覚えるや水心一如の心で泳ぐ等評価基準の違いによって、親和的態度を示し、のびのび活動していることがうかがえる。

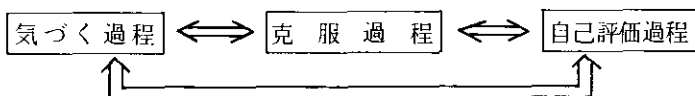
## 〔考 察〕

### 1. 私の水泳授業が学生の人間形成に対しての有効性について

かなり多くの学生が、水泳授業を通して、好ましい方向へ自己形成していることがうかがえた。これは、高部が「体育授業で人間形成ができると考えるのは、冒険的言辞<sup>※21</sup>と相反する結果で、多くの教育者や研究者（水野<sup>※22</sup>、川村<sup>※23</sup>、猪飼<sup>※24</sup>、小原<sup>※25</sup>、大泉<sup>※26</sup>、菅沢<sup>※27</sup>、カール・デーム等<sup>※28</sup>）がのべている、「体育は身体活動を媒介とした人間形成への教育活動」を立証している。すなわち大学正課体育においても、取りあげ方によっては、その本来の目的を遂行することができることを示唆しているといえよう。

### 2. レポート記述にみられる自己形成過程の状況について

レポート記述から、学習者は下図のように気づく過程と克服過程と自己評価機構過程とが一連の



発展過程を構成して、自己形成をはかっていると推察されるが、以下一連の関連構図の各々の過程について考察したい。

### イ) 気づく過程

自己形成過程の発端は、先ず気づく段階であると思われる。「自分の思っている動作と実際泳いでいる動作との違いに驚いた」のように鏡像段階<sup>※29</sup>の認知であり、「体調に合わせて泳ぐ」のように泳ぐとき、自己の体力あるいは身体に対する自己認知であり、「初心者の泳ぎや熟練者の泳ぎ」による対他——対自化現象であり、「今までの体育とは異っていた」という異文化の認知等、いずれの場合にも自己の無知や未知に気づく現象の生起することは共通している。

ところが人間は本性上、ポイティンデックのいう「体験を気づかないことがよくある。」<sup>※30</sup>やボルノーのいう「馴染んだ環境世界への不注意が生物学的に合目的行動<sup>※31</sup>やメダルト・ボスの、「自分の無意識の内容を知り、患者に気づかせる」<sup>※32</sup>等に示唆されるように人間は気づきにくい存在であるのかもしれない。

これは、広松が指摘している「人間が一定の質的・量的な刺激に対して反応するとき、自由意志的な選択反応<sup>注</sup>をする。」<sup>※33</sup>ことに起因していると思われるし、木田がメルロ＝ポンティの解説をしているなかの、「作動しつつある志向性<sup>※34</sup>が存在しないと、人間は刺激に反応しないままているわけである。

大浦は「生徒をまず彼自身の無知から出発して、真の学習者・創造者に目覚めさせる<sup>※35</sup>」とのべているが、作動しつつある志向性や人間の自由意志的な選択反応という本性的現象とを考え合わせると、学生にいかにして気づかせるかが、学習の基本的に重要な課題といえそうである。

### ロ) 克服過程

「10分間泳は自分との闘いである。……結構疲れるし、苦しい、が記録はそう簡単に伸びるものではない」という状態のなかで、何を自分の危機として選び、それを如何にして克服していくかは個人の成長にとって重要である。エリクソンは「成熟の過程の特徴的に認められる現象として、危機（苦しみや不安、孤独、罪悪感等）と戦い、それを克服すること」<sup>※36</sup>とのべ、ロロ・メイは「自我の誕生には、不安と内なる危機という高い代価をはらってのみ得られること」<sup>※37</sup>とのべ、オールポートは「成熟というのは、わたしたち自身の存在の矛盾、衝突する条件のすべてを自覚し、またなにかの方途で相剋する諸条件の協同者となること」<sup>※38</sup>とのべているように、自分にとって危機となることを克服することは、人間の成長にとって欠くことができないと思われる。

水泳能力の優劣と自己形成とに関係が認められなかったことは、水野の指摘する「体力と人間性の不連続性<sup>※39</sup>」と類似した現象であると思われる。いずれの場合でも体育は人間の存在の根源と考

られる身体を出発点<sup>※40</sup>とし、自己の全体経験を積み重ねて、人間的な成長をはかってきたと思われるのに、心身ともに健全な発達を遂げていない現象が存在する場合もあることが示唆された。われわれは、その原因を究明し、早急な解決をはかるべきであろう。克服過程において指導者は、R・ロジャースの心理療法の手法を学ぶ必要がある。即ち「こうした硬く、狭い自己概念がいかにありのままの経験の認知を妨げているかを本人に覚らしめる場を提供する<sup>※41</sup>」ように援助することであり、またインドの賢者がメダルト・ボスへさとすようにのべた「絶えまのない静かなそして同時に最高に集中した内面の世界へ聴き入ること、待つことは『あるがままにあらしめること<sup>※43</sup>』となるような雰囲気づくりを創意工夫する必要があると思われる。

#### ハ) 自己評価過程

「人間の意識は、自我を中心としてある程度の統合性と安定性をもっているのだが、その安定性を崩してさえも、常にそれより高次の統合性へと志向していく<sup>※43</sup>」といわれるが、気づく過程においても、克服過程においても常に自己評価を正しく行えるかどうかが大切であると思われる。

レポート記述にみられるように、記録が伸びている、楽に進むようになった、できない技ができた、水に対する恐怖心が軽減した等、自己評価の基準には個別性があるし、人それぞれによって多角的、多様性に富んでいるので、それらに相応した評価法を策定することが重要であると思われる。

以上、気づく過程 ⇨ 克服過程 ⇨ 自己評価過程と一連の発展的、螺旋的關係構図という観点で考察してきたが、われわれは、連続的に好ましい自己形成を遂げるとは限らないことも自己評価基準の範ちゅうに含んでおく必要があると思われる。すなわち、エリクソンは「個人の成熟過程は足踏みしたり、寄り道したり、より未成熟な段階に逆戻りしたりすることも稀ではない。<sup>※44</sup>」に示唆されるとおりである。

また教師として心得ておくべきこととして、池見のいう「ある人が長い間もってきた信念、思想、態度などのように知的なものであると同時に情動的体験とも密接に結びついていることは、知的だけの働きかけでは不十分で、情動的体験の裏づけが必要となる場合すら考えられる。<sup>※45</sup>」に示唆されるように、体験を通して納得させることも、体育では大切だと思われる。そのことが「身をもって理解する」ことで、気づく過程へフィードバックし、再び、自己形成への螺旋關係へ進展するのであろう。

#### (まとめ)

一年間の水泳授業における学生の自己形成の状況は、次のようにまとめられる。

1. 受講学生は水泳授業において好ましい方向への自己形成をはかっていることがうかがえた。なお「知の変貌」はレポートをまとめるのにかなり有効であったと思われる。
2. 水泳能力と自己形成過程との関係は、パフォーマンスの優劣による差は認められなかったが、

パフォーマンスが顕著に伸びた者はより大きな自己形成過程状況を記述する傾向がうかがえた。

3. 自己形成過程の状況としては、自己実現による場合、自己認識の拡大・深化による場合、他我認識(対他→対自化現象)による場合、カルチュア・ショック現象による場合が、記述よりまとめられる。

[今後の課題]

体育・スポーツ教育は、人間の基本的基盤である身体とそれを基にした経験とを問題にしなければならぬため、人間にかかわる諸領域で明らかにされた知見を活用してゆく必要があると思われる。そのためには、さらに識見を広めることと深めることであり、それらを統合化して構築し、授業研究に適用してゆくことが今後の課題であろう。

## 引用文献

1. 浅田ら 正課体育のカリキュラム編成体制とその具体的教育方法の改善に関する研究, 大学体育研究第2号 筑波大学体育センター 1979
2. 浅田ら 正課体育のカリキュラム編成体制とその具体的教育方法の改善に関する研究, 大学体育研究第3号 筑波大学体育センター 1980
3. 下中邦彦 哲学事典 平凡社 51.2, P895
4. ロロ・メイ 小野泰博訳 失われた自我を求めて 誠信書房 50.4 P90
5. 大泉孝 松井三雄編 教育・体育・スポーツ 杏林書房
6. 池見西次郎 続心療内科 中公新書 54.9, P15
7. 佐治守夫編 講座心理学10人格 東大出版 1979.1, P196~200
8. 小口忠彦 現代のエスプリ No.169 至文堂
9. A H マスロー 上田吉一訳 人間性の最高価値 誠信書房 51.2, P56~61
10. M. J ランゲフェルト 上田吉一訳 続教育と人間の省察 玉川大出版 56.6, P105
11. 渡部昇一 人間らしさの構造 産能大出版 55.4, P54~55
12. 前掲書 (7) P19
13. 前掲書 (4) P108~112
14. 前掲書 (6) P33
15. 前掲書 (4) P86
16. 木田元 現象学 岩波新書 P133~134
17. M. ブーバー 児島洋訳 人間とは何か 理想社 55.4, P178
18. 石田英一郎 人間と文化の探求 文芸春秋社 49.9
19. 長島信弘 現代のエスプリ(カルチュア・ショック)No.161 至文堂 55.12, P41~48

20. T. ホール 岩田広治ほか訳 文化を超えて TBS ブリタニカ P 234~235
21. 体育原理研編 体育における人間形成論 不昧堂 49. 9, P 133
22. 水野忠文ほか 体育教育の原理 東大出版会 1976. 4, P 4~5
23. 前掲書 (21) P 77~88
24. 前掲書 (5) P 228~239
25. 前掲書 (5) P 28~56
26. 前掲書 (5) P 57~63
27. 菅沢実 日本体育学会 体育学研究 VOL 23 №3 1979
28. カールディーム 福岡孝行訳 スポーツの本質と基礎 法政大出版 P 34
29. 石川元編集 現代のエスプリ(鏡と人間の心理) №155 55. 6, P 5~26
30. ボイティンデック 浜中淑彦訳 人間と動物 みすず書房 1977. 12, P 61
31. ボルノー 西村 西村皓・井上坦訳 認識の哲学 1975. 5. P 112
32. メダルト・ボス 三好郁男訳 心身医学入門 みすず書房 1980. 1, P 139
33. 広松渉 現代思想 VOL 9-3 青土社 1981, P 52
34. 前掲書 (16) P 61~65
35. 大浦猛編 人間像の探求 第一法規 51. 5, P 87
36. 前掲書 (7)
37. 前掲書 (4) P 84
38. オールポート 豊沢登訳 人間の形成 理想社 48. 4
39. 前掲書 (22) P 1~4
40. 前掲書 (5) (海後宗臣) P 10
41. 前掲書 (7) P 87
42. メダルトボス 霜山徳爾ほか訳 東洋の英知と西欧の心理療法 みすず書房 P 212~213
43. 河合隼雄 無意識の構造 中公新書 53. 7, P 146
44. 前掲書 (7) P 199
45. 前掲書 (6) P 198

## § 2 脳性麻痺学生の水泳

### 脳性まひ学生O君にとっての「泳ぐということ」

○はじめに

筑波大学において開設されているトリム運動の授業の中で、今回、脳性まひ学生を対象として水泳指導を行なったところ、わずかな授業時間にもかかわらず、読みとられるべき知見のある成果を得たので発表する。

この事例報告では、まず実際の授業に至るまでの過程が示される。次に、実際の授業展開を、ポラロイドカメラやV・T・R・を併用した授業記録を基に記述する。その際、O君の運動経過に観察されるものと、O君自身による記述を重要視した。これらの事実を解釈することにより、今後の脳性まひ者の水泳指導、そして身体障害者の体育授業に生かせる知見や指導の論理を導き出そうとした。

○授業の目標設定までの過程

脳性まひは、医学的には受胎から生後1カ月までの間に生じた大脳の非進行性病変に基づいた、永続的な、しかし変化しうる随意運動および肢体の異常と<sup>(注1)</sup>言われる。O君の場合も例外ではなく、難産の末、仮死状態で出て来たことが原因とな<sup>(注2)</sup>っていた。授業に先立ち、O君の現在の動きや姿勢の中に、筋の異常緊張、立位や歩行のアンバランス、両下肢の内転、尖足位等の特徴を観察した。その際、障害にのみ目を向けるのではなく、残存している能力も把握しようとした。<sup>(注3)</sup>わずかな肘のかき、下肢の前後運動、そして呼吸機能も正常であることから、プールの水という環境における運動の可能性を見きわめ、機能も向上することを予測した。それは、運動経過に観察されるはずである。

次に水泳運動の特性をO君の状況に照らしてみると、O君にあった課題が考えられるのであり、それには、「泳ぐということ」の正しい認識が必要であった。われわれは、「独力で、水に浮き、水面から顔を出して息つきをし、進むことができている状態」を、「泳ぐことができています」と想定した。

○授業目標

O君の希望もとり入れ、授業の目標は、「泳げる」状態になっていく過程を通して、「よろこび」が感じられるようになることとした。これは、水泳運動が、健康な人に対して持つ意味と同じか、あるいはそれ以上の意味がO君にもあるはずであるという前提に<sup>(注4)</sup>立つ。

○授業方法

目標達成のために、O君の運動経過に観察される徴表等を解釈し、状況に照らして与える指導言語のよりどころとした。その場合、O君にとっての泳ぎの意味を解釈することは必要不可欠であった。すなわち、学習過程において、O君が現在何につまづき、何を自己の課題としているかということを、そのつどO君にリポート形式で記述させ、提出してもらおう事は、目標達成に有効であると思いついたのである。O君に記述の機会を多く与えることにより、彼の気持ちに近づこうとした。同

時に、〇君自身も、内的現象を記述することにより、泳ぎを「泳ぐということ」として、すなわち自身の問題として意味づけできると考えられる。

又、学習過程を助ける方法的補助手段として、ボラロイドカメラ等を活用することにした。これは、運動学で言う、運動の自己観察（Selbstbeobachtung）を助ける意図があったことは言うまでもない。<sup>(注)</sup>

#### ○授業展開の概観と〇君の運動経過および意識の変容の記述

授業は、昭和55年10月2日から昭和56年2月19日まで、週1回ずつ計16回、30分～40分個別指導の形態で実施された。以下、指導内容と、〇君の運動経過および意識の変容を記述する。（表29）

##### (1) 導入における「恥ずかしさ」の克服

水泳運動は、〇君の勇気と決断によって開始された。「恥ずかしい」という彼の一言に含意されたように、水泳は彼にとって、苦痛以外の何ものでもなかったであろう。共に受講していた学生の望みを察してか、やっと同意してくれたのであるが、その勇気ははかり知れない。

##### (2) 水に慣れる課題と「楽しさ」

最初の2回までの授業では、水に慣れさせるため、長い距離を、補助をつけ、バタ足ばかりさせた。（資料1）中学生以来、経験がないので、不慣れによるのか、彼の身体各部位は、異常に緊張していた。そこで肩の前方を両手でしっかり支えながら保護して泳がせた。距離を重ねるにつれ、身体各部位を弛緩させていく様子が認知されたが、これは補助者がいるという安心感があったからであり、顔を水につけたり、補助者の手をゆるめると、すぐに硬直した。恐さがあると同時に、水の浮力に対する運動感覚的知覚も乏しいのだが、バタ足や、背浮きを彼なりに楽しんだ。さしあたって出来そうな背浮きの姿勢をとらせた事は、彼にとっては画期的な出来事であった。すなわち、浮き輪を使わずに鼻と口が水面上に出られるのである。そしてしばらくすると、息の続く限り、今度はうつぶせの浮き身ができるようになったのである。又、この時期には、ひょっとしたら泳げるのではないかという期待を彼の記述から読みとれる。（リポート「水との対話」）（資料2）しかしながら補助者を信頼しているにすぎなかった。

##### (3) 浮力の知覚と呼吸法への「意欲」

補助をしないと、彼の泳ぎは方向性がとれず、何回も方向を修正してやらねばならなかった。その間、補助具をつけて浮いたり、シュノーケルや水中メガネ、あるいは足ヒレをつけて泳がせたりした時の感動が大きかったにせよ、彼自身が望んでいた浮きは、息つきをしながら進む浮きであった。すなわち、呼吸法を伴った浮きであり、水中で息をはけない彼は、自分自身にあった呼吸法を模索していた。（リポート「呼吸法」）（資料3,4）そんなわけで呼吸法を伴ったバタ足や水



中歩行そして、水中での連続ジャンプのような、同じ運動のくり返しに授業の多くを費やした。水中ジャンプでは、水中で、自身の身体を安定した位置にとどめる仕方をO君に体得させようという意図があった。つま先立ちしかできず、しかも下肢の内転も手つだっただけか、姿勢の不安定な様子が運動経過に観察されるので、プールの四角の浅い一角で行なわせた。この間の運動のさびき方に関する対話は、口の呼吸運動の表現等にみられる「ウッ、パ、ハー」のように、感覚的言語によった。水中ジャンプが独力で近い状態で実施され、浮力の知覚が芽生え始めた頃に、「プールサイドから独力で離れ、又元の位置に帰って来なさい」というような課題等を与えた。これは、身体各部位を直接指し図すると、時々緊張が見られるので、運動経過そのものには教示しないようにしたのである。彼は、自分なりの解決法を、できるだけ弛緩した状態で見つけようとした。そして、時には水中歩行で、時には水中ジャンプで、課題解決に向って彼なりに努力した。まさに自己の課題としてとりくんだのである。この頃は、うつぶせのバタ足でも、息の続く限り独力で泳ぎ、自分の意志で自身の身体をコントロールする仕方を身につけつつあった。この過程の中で、彼は希望をますますふくらませた。(レポート「水泳の授業でやりたいこと」)(資料5)

#### 4) 「泳ぎ」の完成と「よろこび」—「自信」の過程

水に対する慣れを決定づけ、浮力に対する信頼感を彼にもたせる契機となったのは、小さな鼻せんである。それが彼を恐怖心から脱却させ、水中ジャンプと横転の上達、そして関節可動性の増大とあいまって、自ら創案した「泳ぎ」の完成をみた。クロールとか平泳ぎのような既存の技ではなく、われわれが当初想定した「泳ぐことができている」状態に合致した、まさに「ローリングO君泳法」と名づけても良い泳ぎを座した姿勢から自ら飛び込んで行なったのである。(資料6)

この「よろこび」の体験の中で、彼は特に忍耐について、「どんなに苦しい状態になっても、冷静に息をとめて待てば、必ず水面に顔を出せるのだ。人生の中で数多くの苦難に今後ぶつかるだろうか、その時に、この水泳での経験が私を救ってくれる」と結んでいる。(レポート「水泳の授業をうけて」)(資料7)

#### O授業の成果を考える

まず、授業展開の構造を考えてみることにしよう。宇佐美は、教授—学習過程を記号論的に整理している(注。)<sup>(注。)</sup>のであるが、それによるとその過程は、以下の4つの記号段階に分けられ、われわれの授業展開を考察するのに有効である。すなわち①「教科内容」、②「教材」、③「授業刺激」、④「解釈内容」、<sup>(注。)</sup>である。この4段階において、後の段階の記号は前の段階の記号の解釈を通じて作られるのである。①の「教科内容」は、具体的な授業の過程を考慮に入れなくても考え得るような内容である。②の「教材」は、特定の授業を予想して考えられた教育内容であり、われわれの授業では、水泳の特性をO君の情況に照らして導かれた指導内容に含まれている項目にあてはまる。

(表29)そして、われわれが授業で最も気をくばった指導言語等は③の「授業刺激」に吸収される。すなわち、宇佐美によれば、教師が授業において与えているのは、「授業刺激」であって、②の「教

表20 ○授業日誌

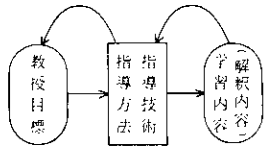
「泳げる状態」になっていく過程を通して、「よろこび」が感じられるようになること

「泳げる状態」・独力で、水に浮き、水面から顔を出して息つきをしなから、進むことかできていく状態

○授業展開の概観

授業時数	ねらい	指導内容	指導方法・指導技術	運動経過に観察されるもの	意識の変容過程
① 1	「水に慣れる」	○ 90cmバタ足	○ ホロライトカメラにより、自己観察を助ける。 ○ 1対1でしっかりと補助 ○ 手のかき等の指摘 (リポート提出「水との対話」) ○ 同じ運動の反復	○ 筋の異常緊張 ○ 向腕の屈曲 ○ 向下肢の内転 ○ 尖足位 ○ 立位、歩行のアンバランス	恥ずかしさ ↓ 勇気 ↓ 補助者への信頼 ↓ 楽しさ ↓ 希望 ↓ 意欲
②		○ 浮き身 ○ 手のかき方			
③ 1	「浮力の知覚」	○ 呼吸練習 ○ 水中ジャンプ ○ 水中歩行	○ ホロライトカメラの使用 (リポート提出「呼吸法」) ○ 運動経過の全体的印象を感覚的言語で表現 (対話) (リポート提出「水泳の授業でやりたいこと」) ○ O君の希望する運動の回復 ○ 補助の手をゆるめる ○ 解決法を本人に残しておくという運動課題 (自由な運動課題 制限された運動課題 ○ ほめ言葉の増大 ○ 補助具等により、運動範囲の拡大	○ 身体各部位の弛緩 ○ 「楽しさ」とうらはらの「恐怖」の表情 ○ 肩か前に出るようになる。 ○ 手のかきが強くなる。 ○ 水中での立位姿勢のバランスがよくなる ○ 泳ぎの方向修正がある程度できるようになる	希望 ↓ 意欲 ↓ 浮力への信頼
④ 1		○ 100~150mバタ足(毎時限) ○ 方向修正 ○ 手のかきの強調 ○ 独泳の試み ○ シューケル、足ヒレマスクの使用(潜水) ○ 呼吸法			
⑤ 1	「自己の身体を信じる」	○ 連続水中ジャンプ ○ 横回転の練習 ○ 水中ジャンプ(息つき) ↓ 背浮き ↓ 立位姿勢 ○ 腰かけ姿勢からの飛び込み ↓ 背泳ぎ ○ 「ローリングO君泳法」	○ ホロライトカメラの使用 ○ ほとんど補助をせず、O君の主体性にまかせる ○ 鼻せんの使用 (リポート提出「水泳授業をうけて」)	○ クロール運動に近い泳ぎの流れ ○ 生き生きとした表情 ○ リラックスした背泳ぎの姿勢 ○ うつぶせの姿勢で進行し、途中何回も身体の縦軸で回転し、あおむけの姿勢になって、呼吸をする。 ○ 肘、肘、腕の可能性増大	意欲 ↓ 忍耐 ↓ 自己の身体への信頼 ↓ 「よろこび」 ↓ 自信
⑥ 1					

○授業の構造



○運動経過に観察されるもの

- ・ 「できない」 → 「できる」ようになっていくさばき方の状態
- ・ 動作機能が進む様子
- a.c述から読みとられるもの
  - ・ 主体性の伸び、「忍耐」等
  - ・ 「できる」ようになる仕方
  - ・ 「できている」状態の知覚・認識
  - ・ 動作機能が進む感じ

材」ではないのである。そして、教材が「授業刺激」に変形されてでなければ、学習者に達し得るはずはないのである。④の「解釈内容」の段階では、学習者（解釈者）がすでに持っている経験からの資料を再構成するのであり、「子どもは、教師が与えたものをみなそれぞれ違った屈折のさせ方(注8)をしてくわがる」のである。特に事実を認識することに関しては、単に言語によって意識されるレベルにだけ限られた働きではないのであるとし、「認識は、記号の解釈であり、この解釈の作用には、経験の組織のかなりの部分(注9)が関わっている」と言う。このように考えると、体育の授業における技能も技術も、同じ「認識」から表現されたものとして考えられ、それゆえに学習者の認識の過程を何らかの方法で知ることは、教授—学習過程にとって必要不可欠であると考えられる。

さて、われわれは、記述分析法を採用したのであるが、O君の「解釈内容」は、運動をする仕方から、より高次の精神的次元にまでおよんでいる。すなわち事実認識が先立ち、様々な意識が変容していく様子(注10)がうかがえる。すなわち「何かを知ることなしには、どんなく気持」を持つこともできない」のであり、O君は、自分なりに動かす仕方を知って、あるく心情、く態度」を持つにいたったのである。「ある心情・態度を持つというのは、ある質の解釈内容を持つことである。」(注11)

O君は「よろこび」という感情を持つに至ったが、水泳運動そのものの本質的特性を、われわれが正しく認識し、O君の情況に照らして目標を設定したことが、何を彼に知らせたらよいかという問いに答えるのを容易にしたと考えられる。同時に、その時々(注12)のO君の運動経過が全体的にどのようなになっているかということについての情報伝達に専心した事は、目標達成を容易にした。しかしながら、O君の意識の変容をみれば、「恐怖心」「楽しさ」等様々であり、目標として「よろこび」を前面に持って来たように感じさせてしまうことは的を得ていない。すなわちわれわれが専心したように教師ができることは「何かを知らせることだけなのである。」

さて、この授業の成果は、何よりもO君の主体性によるのであるが、以上のことを考えると、彼の努力の過程や、認識の過程を対話や記述から共感して読みとりながら、「泳げる状態」へ至る内容やその時々(注12)の事実を、ある具体的な指導方法や指導技術によって彼に知らせることができたことにある。

最も苦勞した事は、補助者への信頼から水の浮力への信頼へと導ぶく事であった。それは恐怖心をなくす事につながる。そこで、水中で身体を安定した位置にとどめる仕方の感覚を彼に持たせるために、水中ジャンプ等を多くの時間、様々な状況下で実施させた事は大変有効であった。又、時々、補助をしながら、異常な姿勢反射を抑制し、正常な筋肉の緊張と運動パターンを促進するために、手のかき方のポイントを触れながら指摘できたし、ボラロイドカメラ等の視覚的手段も、彼に自己の運動のイメージを持たせる上で、「授業刺激」として有効であった。特に配慮した事は、指導言語であるが、運動のさばき方に向けられた言語は、運動経過の全体的印象を感覚的に表現したものであり、目標達成を助けた。指導言語の中で、特に有効であったのは、フェッツやメラーがまとめている運動課題（Bewegungsaufgabe）という方法学的概念に相当し、解決法は本人に残されている。(注13)先述したようなO君への運動課題は、運動をできるだけ弛緩させた状態で形成する上で、非常に有効であったと同時に、それを自己課題としてO君自身とりこんでいく様子(注13)がうかがえ

た。泳げる状態」になるまでの大体の指導の流れは、ある程度系統性をもてたのであるが、具体的指導方法は、O君の側に立ったので、そのつど変化した。それはO君に興味を持たせる事になった。

○まとめにかえて

何をどのように知らせるのかを常に問い続ける事。学習者の内的現象を記述から読みとり指導技術等に生かす事。水泳運動の本質的なものを正しく認識し、学習者の状況に照らして目標を設定する事、その時々的事实を知らせる事。1対1の補助、運動課題等の指導言語。水中ジャンプ等の反復運動。既存の運動形態に拘泥しない事が脳性まひ者の水泳指導に有効であると考えられる。恵まれた水泳施設や個別指導も重要ではあろうが、つまるところ学習者の側に立ち、主体性をはぐくむ事が第一である。

これまで、脳性まひ者の水泳指導に関する報告は、日本では少ないと言われる。<sup>(注14)</sup>しかしながら今回の成果においても、水という環境は、指導法によっては筋を自分で弛緩させ、不自由さをとりのぞくのに役立つ事も明らかになった。このように水泳は、水治療法として、水中で身体を動かしながら運動の機能の回復を図る目的に十分使用され得るのであるが、体育授業の中でスポーツをとりあつかう場合、そのように手段的なものとしてとらえるばかりでなく、それをする事自体に意味があると考えた事は、健康な人々と同様、人間の側に立つ事であり、そこに価値があるのではなかろうか。「よろこび」は「自信」につながり、それ以後の機能訓練とか、生活する意欲の向上に与える影響は大であると考えられる。

「おかあさん、家の中って意外に狭いんだね、ぼくは今までとても広く感じていたけどな。<sup>(注15)</sup>」

十年前に初めて松葉づえで家の中を歩けた時の言葉にあるよろこび、希望、夢…。そして今回の水泳の授業を通して得られた経験、すなわち水という環境の中で動くということの経験は、彼の内的世界を拡大し、生きるための心の糧になっている。

（注）

- (注 1) 五味重晴 脳性まひ児のリハビリテーション  
医学書院 P.P.15~20  
小池清廉 障害児とは何か — 医学の立場から —  
教育と医学 28(4) P.P.11~17 1980  
星野公夫 身体障害者の体育—動作から見たアドバイス—新体育 vol.50  
No.8  
P.P.16~19 1980
- (注 2) O君の母の体験記「はげみ」8・9月号 P20 1971
- (注 3) 大川嗣雄 身体障害者にとっての「体育」とは 新体育 vol.50, No.8  
P.P.10~15 1980
- (注 4) (注3)と同じ  
三木安正 障害児とは何か — 心理学の立場から— 教育と医学 28(4)  
P.P.4~10 1980  
伊藤隆二 すべての子どもにかかわる特殊教育 新体育 vol.50, No.8  
P.P.40~44 1980  
村上英治 障害者の自立と自己実現  
現代のエスプリ別冊12月号 P.P.122~P.P.135 1978
- (注 5) 運動の自己観察 (Selbst-beobachtung) は自分の運動を運動覚と言語によって  
知覚し、観察することである。  
Meinel, K. Bewegungslehre Volk und Wissen Volkseigeher  
Verlag Berlin 1971 S.S.121~124  
マイネル, K. (金子明友訳) マイネルスポーツ運動学 大修館  
P.P.123~127 1981  
運動学における自己観察という形態学的考察法の重要性については、岸野が「序説運  
動学」(大修館P.P.44~45 1968)の中で、又、金子が「体操競技のコーチン  
グ」(大修館P.P.274~278 1976)において強調している。
- (注 6) 記号論あるいは記号学は新しい理論であるので定義することは困難である。それゆえ、  
ここでは、記号学を、言語学の理論を記号表現一般に適用することによって成立する  
理論であるとしておく。(野元菊雄「ことばとシンボル」三省堂 P311 1977  
参照)
- (注 7) 宇佐美寛 思考指導の論理 明治図書P.P.18~25 1979
- (注 8) (注7)と同じ P24.
- (注 9) (注7)と同じ P196.

- (注10) (注7)と同じ P187  
 (注11) (注7)と同じ P187  
 (注12) (注7)と同じ P188  
 (注13) フェッツ, F. (阿部和雄訳) 体育の一般方法学 プレスギムナスチカ  
 P.P.102~108 1977

Moller,W. Die Bewegungsaufgabe und ihre Deutung  
 Die Leibeserziehung  
 Beilage Janaur №1 S.S.290~294 1962

運動課題 (Bewegungsaufgabe) という術語は、第1次世界大戦後、オーストリアの体育改革によって学校体育の中にとり入れるように負わされたものである。

- (注14) 武藤芳照 脳性マヒ児の水泳 Training Journal  
 Vol. 3, №7 P.P.50~55 1981  
 武藤芳照 障害者スポーツとしての水泳  
 Training Journal Vol. 3, №8, P.P.40~43 1981  
 (注15) (注2)と同じ P24

《その他の参考文献》

- 中村 裕, 中川一彦 身体障害者とスポーツ 日本体育社 1976  
 大野清志, 村田 茂 脳性まひ児の養護・訓練 — 動作訓練の実際 — 慶応通信  
 1980  
 小島蓉子 国際障害者年に向けての世界の動向 総合リハビリテーション  
 Vol. 7, №12 P.P.917~922 1979  
 矢部京之助 障害者体育の確立に向けて  
 体育の科学 Vol. 31, №7, P.P.446~451 1981  
 高山忠雄 普通学級の体育における障害児の現状と問題点 — 実態調査の最新資料から — 新体育 Vol. 50, №8, P.P.26~30 1980  
 古橋廣之進 水泳健康法 清水印刷 1978  
 馬場四郎 授業の研究 東洋館出版社 1975  
 高田典衛 体育授業の方法 杏林書院 1978



補助をしてもらっての息つきバタ足 80 / 10.16 課外

体幹 トリム運動 レポート

水との対話

風呂以外で水につかるのは中学生時代以来、久しぶりだ。

20歳を過ぎてまたプールに入れるとは思ってもみなかった。身体が太くなくてると、お尻が後用のプールで、浮き輪をつけて、水道が玉するわいいもいらない。

温水プールというので、湯気が立ちのぼっているような、あたたかい水に想像していたが、最初に、プールに足を入れて、その冷たさは身体が強く感じていくのを感じた。先住方がついていてくださるので、水に浮して少しは恐怖はなかったが、寒さと浮力で身体が思うより動かせずうらやま、それはと夜になら感じなくなり、動作もスムーズになっていくのが自分でもわかるくらいになった。また、水の中でシタバタと水に抵抗してもムクムクかえり、水に身をまかせた方が安全なこともわかってきた。

水の中で身体を動かすことにより、左の人、マニシは機能を高めることのできるだろうという期待は、最初からもっていたが、

< 資料 2 >

2月17日、あお向けに、背を浮子で、水に浮いていられるのを体験。これは、心にとすると、泳げるようになるまでは、心にとると、大に期待を込めていたように感じた。浮き輪を付け替わす、水に身体を足まわされて、鼻と口が水面上に出ている状態と、心にとると、大に期待を込めていた。これで、心にとると、水に足まわす、水面上に、お尻が浮いてくるのは、心にとると、大に期待を込めていた。

身体が水に浮くことを知ると、気が大に大きくなり、うらやまになって、息が止められる限り、手足を動かさず、水に浮いて待つのは、心にとると、大に期待を込めていた。実際に、心にとると、大に期待を込めていた。水中で、心にとると、大に期待を込めていた。自分の身体が、水に浮いて、心にとると、大に期待を込めていた。心にとると、大に期待を込めていた。

泳ぐための、第一の壁であった、身体が沈む恐れと、心にとると、大に期待を込めていた。心にとると、大に期待を込めていた。心にとると、大に期待を込めていた。心にとると、大に期待を込めていた。

< 資料 3 >

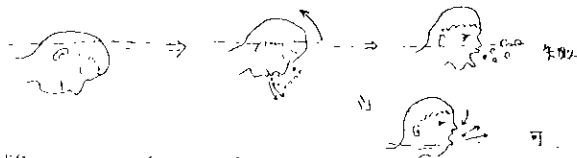
水 / 10 / 23 提出

体前トリス運動レポート

呼吸の仕組み

人間の呼吸は水上に出て泳ぐとしても又水中ではできない見地も無い。かといって水中に長く居るがために泳ぐのは肺呼吸生物としての本分と反し命かともない。どうしても、空気中に顔を出して呼吸し、息を溜めて水中に潜し、という繰り返しの動作を、心かかろうない。この一連の呼吸は呼吸と呼ぶ。

この呼吸というものは他人かやっていける見地とたわいのしい性質のものがあつた。実際、自分で試してみると呼吸の程である。まず息を吐いて顔は水中にひたさるの、とうとうこのことになり、問題は水中で「さて、顔は水面に出すか」と決意してから動作だ。鼻と口から、すこし息を吐き出さる。首を振り上げ、空気中の息を口から肺に送り、口を閉じ、肺にたまる二酸化炭素を排出し、また息を吸い込んで、再び顔を下して水にひたさる。



第一に、口と鼻を水面上に、十分な時間、出しておくが不可欠だ。顔か身体が浮いているのがあつたとしても、果たして、顔を出したまま、その呼吸があることが不安なものであるため、あつてはいい、必要帯の呼吸を吐き出すが可い。

第二に、口と鼻がうまく運動して水に、空気中の息を吸い取り、肺に送りこむという水に入るときの必要がある。口と鼻を水面に出して、

第三に、呼吸の口と鼻を水面に出せば、顔は水にひたさるが、口と鼻に入っている気体が不安定なため、この動作を呼吸と呼ぶ。

これは例は、実際、水にひたさる身体は水にひたさるのと仕方が可い。

水中で息をはけない様子



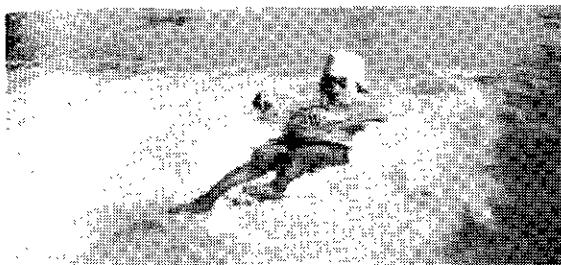
< 資料 4 >



< 資料 5 >



水中歩行（この姿勢から水中ジャンプへ）



背浮きから立位姿勢になろうとする



横転の練習



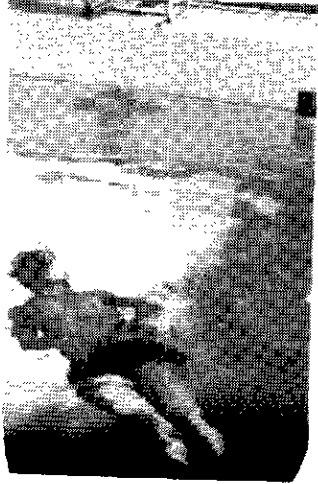
独力での背浮きバタ足

< 資料 6 >

腰かけ姿勢からの飛び込み



ローリングする瞬間



○リポート「水泳の授業を受けて」の一部

I. 水泳がはじまってから、はや10数回の授業を経たが、はじめてプールに入るときには、予想と違っておそろしく、自分の中での動作機能が進歩したことに我ながら驚いている。しかし、それも、先生方の熱心な御指導を受けることかておこなったことである。

このように水への信頼から、水の中での、動作を、自分で自由にコントロールの可能性が生ずれる。どんなに思い切った行動を水中で、試みても、~~平気~~事後には、必ず水面に顔を出して呼吸できるのだと思うと、身体を可能不限り動かさうという勇気があいてくる。

IV. 水泳の時間中、体験的に学ぶことか<sup>こと</sup>は、馬鹿々々しいと思われながらも知らず知らず「忍耐」ということである。水泳をやりはじめるのは、水の中で、ちびちびと苦しむと、じつは馬鹿々々しく、水を飲んだ。しかし、水中で、どんなに苦しい状態になっても、冷静に、息をこめて、待てば、必ず、水面に顔を上げるのだ。人生の中で、数多くの苦難に今後いつか<sup>ある</sup>たろうか。この水泳での経験が、私を救ってくれるかも知れない。